

新制大学制度発足60年に 当たって

経済学部 経済水会 理事長 大森 修太郎



今年は戦後施行された新制大学制度が60年を迎えることになりました。人生で言うと還暦と言うことです。このときに当たって大学の来し方将来への期待など考えてみたいと思います。

我々のころは新制大学という呼び方はやや自虐的に言えば旧制大学と比較されて軽く観られがちであったように感じています。今でも古い方は旧帝大系と対比して言われます。我々の在学当時は地方大学とか駅弁大学などといわれました。こういった感覚は未だに払拭されていないのではないかと思います。それは新制大学が新制大学としての特徴、性格を未だ確立していないからではないかと思っています。

滋賀大学においても彦根高商を母体としていることにある種の誇りを感じていることに現れていると思います。

新制大学が未だに乳離れしていないということになるでしょうか。

大正12年に彦根高商が開校されたとき、その前年に行われた入学試験は東京で行われた(学舎がまだ完成していなかったこともあり)ということです。しかも試験会場は時の第一高等学校であったと書かれています。事情がどうであれその心意気やよしというべきでしょう。

入学した学生たちも「一高何するものぞ」と言うつよい意識を持って勉学に日常生活に励んだことは想像に難くありません。その流れは高商が存続する間連綿と引き継がれてきていたように思います。私は彦根に生まれ彦根に育ちました、そして我が家では長い間高商の学生さんの下宿を提供しておりました(滋賀大になってからも)。子供のころから学生さんに遊んでもらったことを覚えています。子供心に当時の学生さんには社会の範たろうとする態度があったと今も感じております。私が道に外れたことを言ったりしようとしたときにははつきりと「それはだめだ」とたしなめられた覚えがあります。



1962年当時の芹川のケヤキ

高商の学生であるという意識が顕著であったと思います。一方、市民の意識も学生に対して尊敬の念を持って接していたように思います。学生が若気の至りで羽目を外しても高商の学生さんやからと大目に見ていたところもあったように思います。卒業していった学生も時にふれ学生時代を思い出し、下宿を尋ねたり、手紙を出して近況を伝えたり家族と同様のつきあいが続けたように思います。この流れは滋賀大になってもしばらく続いていたと思います。

しかしながら当時でも大学と旧高等学校は当然のことながら格が違っていました。それが呼び名が変わって一律に大学となったのですから、角帽をかぶっていても新制大学だなどと区別されました。あるいはいちいち「前の彦根高商やな」といい直される場面もありました。逆に「昔の彦根高商です」と誇らしげに胸を張ったこともあります。

新制大学制度60年を迎えて思いますのはこの概念がようやくなくなって来たのかなあと感じることです。新制大学の努力に負うところが大きいでしょう。

「上場企業で社長に出世できる大学」の9番目にランクされた(週刊ダイヤモンド 2006.9.23)実績は新制滋賀大学の実力で、もちろん伝統に裏打ちされているとはいえ、その教育方針の根元に基づくものであり、この教育方針をアピールする必要があるのではないのでしょうか。

今大学は全入時代とかで定員割れの大学が多く出ているようです。「残る大学、消える大学」という本が

出版されましたが、ことほど左様に大学の存在意義がうまく問われるようになってきました。社会の求める人材を育てることを強く要求されてきております。

不易流行と言われますが、いまや伝統や歴史に甘んじることが出来なくなってきております。60年を契機にまさに「大学」として地に足をつけた新たな出発をしていただきたいと思います。



ケヤキ並木も偉大になりました